

受容するキリスト教から宣教するキリスト教へ

―韓国キリスト教の展開をめぐる―

秀村 研二

目次

- 一．はじめに
- 二．韓国社会におけるキリスト教の受容
- 三．植民地とキリスト教
- 四．解放後の社会変動とキリスト教
- 五．海外宣教
- 六．宣教地での経験
- 七．おわりに―海外宣教にみる韓国キリスト教

一．はじめに

韓国社会は東アジアにおいてキリスト教を積極的に受容した社会として知られている。たとえば一九九四年の韓国統計庁の統計によるとプロ

テスタントが約八八〇万人、カトリックが約三〇〇万人である。この信者数の数は教会自体の発表によるともつと多くなる。いずれにしても韓国は人口の四分の一以上がキリスト教信者であるという点で東アジアでは特異な社会である。日本におけるキリスト教の布教が、プロテスタントはほとんど同時期に、カトリックは韓国におけるより以前に始められたことを考えるならば、その受容のされ方が如何に異なるかが理解されるであろう。

キリスト教の受容が問題にされるときに主に關心がおかれたのは、キリスト教が如何に受容され、また如何に土着化されたかという点であった。そこでは近代化の過程にキリスト教がどのように関わりどのような影響を与えたかという問題と、外来の宗教文化であるキリスト教が固有の宗教文化と如何に関係をもち自分たちのものとして土着化されていったかという問題に關心が払われてきた。いずれにしても問題とされてき

たのは、非西欧社会である韓国が西欧の宗教であるキリスト教を受入れ、そのキリスト教が社会の近代化に対してどのように関与したか、または関与しなかったかという点であったように思われる。そこで語られるキリスト教は、「近代西欧社会において定着し練磨された欧米型プロテスタント・キリスト教」を前提としていたことは、韓国や日本でも同様である。それはまた韓国や日本のキリスト教の受容の問題とも深く結びついている。

近代化を担うエリート、もしくは権力の中心からは排除されながらも近代化を担おうとしたエリートたちによって受容されたキリスト教は、近代西欧社会を具現するものとして受取られ、それを「真のキリスト教」とみなしてきたからである。このようなキリスト教の受容層は、自らの葛藤を表現することのできる知識人たちでもあった。それゆえにこの問題関心がエリートたちの言説に多くを抛らざるをえなかったこともまた事実である。しかし、現代の韓国キリスト教は一部のエリートによって信仰されている「西欧」の宗教ではなく、幅広い広がりをもった層によって信仰されている宗教である。

ところで最近では、韓国のキリスト教は海外に積極的に宣教をおこなっている。元来キリスト教は宣教に対する関心の高い宗教ではあるが、韓国のキリスト教は西欧の「キリスト教国」と並んで、数多くの宣教師たちを送りだしている。非西欧社会である韓国のキリスト教が、どのような宣教活動をおこなっているのか。それが韓国キリスト教の何を反映し何をもたらしているのかについても併せて考えてみたい。

二. 韓国社会におけるキリスト教の受容

東アジアにおけるキリスト教の受容と近代化の問題については多くはないが、知識人たちの入信と思想に及ぼした影響、ミッションスクールによる子女教育、病院を始めとする近代医療などとの関係については論じられてきた。韓国社会におけるキリスト教の受容に関しても同様の問題は取り上げられてきているが、その多くは知識人層にかかわったものである。それはキリスト教への入信を自己の問題として記録を残してきた人々が知識人たちであったことに他ならない。記録を残さなかった人々がどのように受容したかについては問題が残るところではあるが、まず最初にキリスト教の受容をとりあげてそこにどのような韓国的特徴があるのか、ないのかについて考察を加えてみる。

本論で主にとりあつかうのはプロテスタント・キリスト教についてである。その理由は私が人類学的調査をおこなってきたのがプロテスタント教会であるということ。韓国のキリスト教の中ではプロテスタントがカトリックの三倍ほどおり、より社会的影響力が大きいと考えられること。またもう一つの理由としては、この百年ほどの韓国の歴史の中でより大きな影響をもたらしたのはプロテスタントであったと考えられるからである。もちろんこれは韓国社会におけるカトリックの問題を過小評価しているわけではない。一九九〇年代に入ってから、プロテスタントの増加が鈍化しているのとは反対に、カトリックの数は増加してきており、その影響力は大きくなりつつある点は指摘しておく。まずプロテスタントイズムが韓国社会に受容される約一〇〇年前に受容された

カトリシズムの受容について触れておく。

韓国におけるキリスト教の特徴の一つは、その受容の契機が宣教師による伝道の結果ではなく韓国人自らの積極的で主体的なものであったことである。これはカトリックもプロテスタントも同様である。カトリックの受容は、一七八四年に燕行使として北京にあった李承薫によってなされたという⁽⁴⁾。中国の王朝に対し朝貢し冊封を受けるといって中華の世界秩序に組み込まれていた朝鮮王朝は、清王朝に対しても毎年のように燕行使という使節を派遣していた。この使節は中国での最新情報をもたらしたが、その中にマテオ・リッチをはじめとするイエズス会士たちもたらしていたキリスト教（カトリシズム）と西欧の科学技術とがあった。両班（ヤンバン）と呼ばれる知識人層たちは西欧の科学技術とキリスト教の漢訳の文献とおして西学と呼んで関心をもち、進んで入信するにいたったという⁽⁵⁾。この後の経過としては簡単に以下の点を指摘しておく。まず両班層たちに受入れられ入信するものたちがあった。しかしローマ教皇庁が典札問題で祖先祭祀を偶像崇拜として禁止し、それに従ったが故に王朝政府から罰せられる者がでた。その背景にはまた王朝政府内部における権力闘争が関係していたという。その祖先祭祀の禁止によって儒教を信奉していた両班層のカトリシズムからの離脱が増えたが、一方では両班でない被支配層に信仰が広がっていった。王朝政府はカトリック信者たちに対しては弾圧をおこない教度の教難と呼ばれることになる迫害が加えられた。その迫害を避けて山間に逃亡して、教友村という信仰共同体もつくられ、その中には今日にいたるまで続いている村落が存在する。カトリシズムがこのような歴史をたどった後にプロテスタン

ティズムが朝鮮半島に登場する。

十九世紀後半になると朝鮮は欧米や日本の力にさらされるようになった。また王朝内部ではそれまでの政治の在り方を批判し実学思想による改革をめざす開化派と呼ばれる人々があらわれ、西欧の政治制度や科学技術を受入れて改革をおこなおうとしていた。彼らの中にはキリスト教を含めて西欧の文明を受入れようとしていた人々がいた⁽⁶⁾。一八八三年に東京にいた李樹廷が露月町教会で朝鮮人初めてのプロテスタント信者として受洗をした⁽⁷⁾。前述のようにプロテスタントへの入信も自発的におこなわれたのだった。彼は横浜でマルコ福音書の漢字ハングル混じり文への翻訳と四福音書と使徒行伝の上海和漢訳聖書にハングルで訓点をつけたものを印刷刊行し、それを携えて帰国したが捕らえられて処刑された⁽⁸⁾。李樹廷の受洗とは別に満州の牧丹にいた人々の中でプロテスタント・キリスト教に入信した人々があり、その内の一人である徐相崙によって一八八二年から一八八七年にかけて新約聖書全体が翻訳・刊行された⁽⁹⁾。徐相崙は故郷の黄海道松川に帰って布教をおこない、一八八四年に韓国人の手になる最初の教会堂を設立した。このように宣教師の手による伝道が始まる前に、入信や布教がおこなわれ翻訳された聖書と教会堂が存在していた。一八八五年に最初の宣教師が入国し⁽¹⁰⁾、欧米のミッションが相次いで韓国に宣教師を送り込んだが伝道活動は公には許されていなかった。宣教は教育や医療などをとおしておこなわれていった。宣教の対称性としては社会の上層でない人々や社会的に低い地位を与えられていた女性を中心とされ、女子への教育もなされて信者を増やしていった。

清、ロシア、日本の朝鮮半島をめぐる争いのなかで、キリスト教は西

欧文明を背景とした新しい宗教として受入れられていった。入信した人々の中には、西欧文明によって社会の近代化をはかろうとするエリートたちや自立的中産層がおり、⁽¹¹⁾キリスト教信者になることによって西欧文明に接近しようとしていた。またもう一方には現実の生活の苦しさからの解放を求めて入信した人々があり、特に儒教を規範とする伝統的な価値のもとでは男性の下におかれていた女性たちが、キリスト教のもつ自由や平等などの観念にひかれて入信していった。⁽¹²⁾

以上から簡単にキリスト教の受容の初期についてまとめると次のようなことがいえるであろう。一、朝鮮半島へのキリスト教の受容はカトリック、プロテスタントともに宣教より以前に自主的に入信がなされた。二、キリスト教を受容することによって社会改革をはかろうとするエリート層たちがいたこと。三、彼らエリート層（両班）たちにとってキリスト教への入信は彼らのバックボーンでもあった儒教規範との葛藤を伴った。四、一方では儒教の伝統的規範のもとで下位におかれていた女性や庶民たちの入信があった。

三、植民地とキリスト教

日本による朝鮮半島の植民地支配期のキリスト教については受難と抵抗の歴史として語られる。日清戦争、日露戦争は朝鮮半島をめぐる日本と清・ロシアとの争いであり、最終的には一九一〇年に日本が韓国を植民地とした。その亡国にいたる過程のなかでキリスト教信者数は増加をしていく。一九〇〇年に八万人だった信者（プロテスタント）は、一九

一年には一六万人となった。この間の一九〇七年に大復興会（テプフンフェ）と呼ばれるリヴァイヴァル運動が起き信者数を増加させたのであった。韓国を植民地にした（しようとしていた）国は非キリスト教国の日本であった。キリスト教には日本の圧力からの解放を求める人々が入信をし、実際多くの宣教師を派遣していたアメリカに対しては王朝政府も日本を牽制してくれるものと期待をしていた（期待は果たされることはなかった）。エリート層においても国の近代化のためと日本からの救国のために入信する者が少なくなかった。反日本という点においてキリスト教とナショナリズムは結びつくことになる。それを象徴するのが一九一九年三月一日から起こった三・一独立運動におけるキリスト教の信者・教会の果たした役割であった。独立宣言文に署名した三三名の内一六名はクリスチャンであり、独立運動は教会のネットワークを通じて全国に広まっていった。エリート層だけではなく幅広い層の信者をキリスト教会がもっていたことと全国的なネットワークをもつ組織であったことによって運動の中心的な役割を果たした。宣教師たちはこの運動に自分たちは無関係であることを表明し、独立には関心がないことを示した。⁽¹³⁾

朝鮮は中華帝国の周辺にありながら独自の文化を保持続けてきた社会であり、長い中央集権政治により均質性の高い社会をつくっていた。そのため植民地化という状況に対して民族としての一体感をつくりあげることは困難ではなく、それにキリスト教が結びついたといえる。一九〇七年の大復興会は亡国を目前にした状況のなかでの信仰的高揚でもあったが、今日みられる韓国キリスト教のスタイルをつくったものとしても

重要である。⁽¹⁴⁾一つには早朝祈祷会（セビヨク・キドフェ）（毎朝五時からおこなわれる）が制度化されたこと、通声祈祷（ヘトソン・キド）（参加者が全員各自の祈祷を声を出しておこなう祈祷）が一般化したことである。

このような中で教派門における教会一致の運動が起こり多くの人々に期待をいだかせたが結局実現しなかった。理由は宣教師たちの他教派との連合に対する不熱心にあつたといわれる。そこには宣教師を派遣していた本国教会の思惑もあつたとされる。また宣教師たちが韓国教会を支配下におこうとしていたことに対する反発も生まれた。⁽¹⁵⁾

一九三〇年には信者数は三七万人となるが、日本の植民地での皇民化政策の一つであつた神社参拝の強制は韓国のキリスト教会に後々まで影響を残すことになった。神社参拝を偶像崇拜として拒否したプロテスタント教会も結局は、「愛国的儀式」として参拝を受入れざるをえなかつた。この時の反対の度合いが植民地解放後に問題となり、教派が分裂していく遠因ともなつた。⁽¹⁶⁾一九四五年には日本基督教団朝鮮教団として合同がなされ、バプテスト教団やホーリネス教団などは解散させられた。⁽¹⁷⁾

韓国におけるキリスト教と植民地主義の関係は宗主国が非キリスト教国である日本であつたため、他の非西欧諸国におけるものと異なつていゝ。韓国社会ではキリスト教Ⅱ西欧文明Ⅱ植民地主義という図式とはならない。かえつてキリスト教には植民地主義からの解放をもたらすものとしての期待が込められ反日・民族主義と結びつくことになる。キリスト教Ⅱ反日・民族主義Ⅱ（西欧文明）という関係である。西欧文明については宣教師たちが持込んだ医療・教育、そしてキリスト教がもつ思想

を別とするならば、近代的なシステムはそのほとんどが日本の植民地統治によつて韓国社会に持込まれた。これも西欧諸国によつて植民地化された他の地域と韓国とが異なる点である。

四．解放後の社会変動とキリスト教

一九四五年八月の日本の敗戦による植民地からの解放とともに北緯三八度線をはさんで北側にはソ連の後押しを受けた共産主義勢力と南側にはアメリカ軍に支持される勢力が対峙することになった。キリスト教が受容されて以来北部に信者数が多かつたのであるが、共産主義下のキリスト教弾圧を嫌つて多くの信者が南に移動した。とくに一九五〇年からの朝鮮戦争では多くの信者が難民として南に避難した。これらの人々は都市に住み自分たちの手で教会をつくつていった。現在韓国の中にある巨大教会のいくつかはこの時期に北の出身者たちと牧師によつてつくられた。共産主義下の教会弾圧の経験により韓国のキリスト教は反共産主義の色彩をもつことになる。またこの時期にアメリカ軍は援助物資の配給を教会を通しておこなうことがあつたため信者となる人が多かつたともいわれる。⁽¹⁸⁾

一九六一年にクーデターで政権を掌握した朴正熙大統領のもとで一九六〇年代後半から韓国は高度経済成長を実現していく。それにとりなつて農村部から都市部への人口移動が生じ大きな社会変動が生みだされることになる。都市部では若年の単身者や核家族の割合が増加する。彼らは農村の伝統的価値規範であつた儒教を完全に受入れる期間がないまま

に都市へと移動したために、そのような伝統的な儒教規範からはより自由であった。そのような人々は新しい西欧文明を体現するかのような教会に集められていく。特に女性においてそれは顕著にみられる。まだ社会的に制約が多く社会的活動が少なかった女性たちに新しい人間関係や役割を提供する結接点として教会は機能していった。教会の区域の集りや聖歌隊への参加などによって、都市に出てきた女性たちは新しい世界を見出すことになる。一九六〇年代から一九八〇年代にかけて信者数は急激に増加していく。⁽¹⁹⁾

強力な軍事政権のもとで経済的には豊かになっていくが政治的には自由がなく、民主化闘争が一九八〇年代半ばまで続くことになる。その民主化闘争の中でキリスト教は大きな役割を果たしていく。反日・民族主義運動や反共産主義と同様にここでも民主化という政治的立場を韓国のキリスト教はもつことになる。どの時代にもクリスチャン・エリートとも呼べるような人々によってキリスト教は社会をリードしていく役割を担わされていたとみなすこともできよう。⁽²⁰⁾

高度経済成長にともなう産業化・都市化は一方では都市に多くの貧困層も生みだしていった。それらの人々との連帯を強調する「民衆神学」の立場から産業宣教がなされ、社会問題と深く関わっていき多くの信者を獲得していった。⁽²¹⁾都市化の進展とともに教会の数は増加するが、その多くは開拓教会（ケチョク・キョフエ）と呼ばれ、そのほとんどは牧師がビルなどの一室を借りて始めた小さな教会であった。そのような教会が乱立したために信者数が増加していったこともできるであろう。順調に信者数を増加させてきたが一九九〇年代に入ると増加率が急激に

鈍化してきている。経済的に豊になったための現象であるともいわれる。⁽²²⁾一九九七年後半からの経済状況の悪化は教会経営にも大きな影響を与えている。それまで熱心に通ってなかつた人が礼拝に出席するようにはなつたが献金の額は減っており、開拓教会のような小規模教会が閉鎖されることも多い。

五 海外宣教

韓国のキリスト教は以上のような歴史を経験してきた。現在の韓国キリスト教は、その宣教の対称を国内ばかりでなく国外の韓国人以外の人々に対して積極的に宣教をおこなっている。国外に派遣されている宣教師の数でいうと世界で四位になるともいわれる。キリスト教の積極的な受容から積極的な宣教は如何にしてなされているのであろうか。

韓国人の手によるキリスト教の海外宣教は植民地期における満州地域や日本にいる同胞への宣教がなされてはいたが、⁽²³⁾本格的におこなわれるようになったのは一九七〇年代から一九八〇年代はじめてになってからであった。⁽²⁴⁾韓国社会はアメリカ合衆国をはじめとして多くの移民を送りだしたが、まずその移民社会への伝道のために宣教師たちが海外へと出ていった。⁽²⁵⁾そののちに韓国人以外の人々に対する宣教もおこなわれるようになる。一九八六年に海外に派遣されていた宣教師は八九の機関（個別教会を含む）から五一一名が四七カ国で宣教活動をおこなっていたが、⁽²⁶⁾そのうちの約半数が韓国人以外の人々を対称とする宣教であった。この時期の韓国人の宣教師に対する評価は高いものではなかつたようである。

その要因として、宣教における訓練不足、性急に結果を求めるプロジェクト中心の活動、宣教師間の非協力、宣教への財政的プランの欠如と持続性の欠如などがあげられている⁽²⁷⁾。

それが一九九〇年代に入ると教団による組織的な宣教がおこなわれるようになり、一九九六年には一三八カ国において四四〇二名の宣教師が宣教活動をおこなっている。そしてそのほとんどが韓国人以外の人々を対称とするものである⁽²⁸⁾。とくに一九九〇年代になってからの宣教師数の増加が著しい(表)。宣教師の訓練や派遣も教団の手によって組織的におこなわれてきている。このような変化は韓国の経済力が大きくなり国際的影響力が大きくなっていくのと並行しているとみなせよう。

表 年度別宣教師数

年 度	宣 教 師 数
一九七九	九三
一九八六	五十一
一九九二	二、五七六
一九九四	三、二七二
一九九六	四、四〇二

しかしこのように多くの宣教師がこの時期に海外にその活動の場を求めたのには国内的事情もあったように思われる。前述のように高度経済成長とともに信者数を増やしていった韓国のキリスト教は、一九九〇年代に入るとその成長率が鈍化し実質的にはマイナス成長となったといわれている⁽²⁹⁾。四一歳のある長老派教会の牧師の語るところによると、神学校の同級生八〇名のうち堂会(タンフェ)のある教会(長老を選出する

だけの信者数をもっている教会)の担任牧師となっているのは二〇名ほどで、残りは教会の副牧師⁽³⁰⁾をするか自分で開拓教会を開くしかなく、海外に宣教師として派遣されているのが五名ほどいるということだった。もちろん福音を述べ伝えるという使命もあるが、国内でなかなか牧師の職を得ることが出来なくなっているのも海外に宣教師として向う要因だろうとこの牧師は語った。

次に長老派の保守的なある教団の宣教師派遣の実際についてみる。この教団は韓国のキリスト教の中では一番多くの宣教師を派遣しているのだが、宣教師としての訓練をおこなうためにMTIといわれる教育機関が設けられている。一九八三年に始まったときには夏休みを利用して神学校の神学生を対称とした一ヶ月のプログラムであった。一九九五年からは教団の機関となり年間をとおした訓練プログラムがおこなわれるようになった。訓練を受ける人のほとんどは神学校を卒業して牧師按手礼を受けている牧師たちである。結婚している場合には夫婦と子供の家族全体が派遣されるので、訓練は夫婦一緒におこなわれる。二二週を一回のコースとしてこれを四回繰り返して受講するが、ここでは信仰や宣教に関するもの他に宣教地の事情や言語に関する科目などを学ぶ。さらに宣教地で役にたつように、経理、土木、ヘア・カット、コンピューター技術などの基礎も選択できる。講師は専任が五名、外部からの講師が五名である。このようなプログラムを数回受けてから宣教師として派遣されることになる。訓練機関としてほしい一年半から二年を予定しているという。訓練を受ける費用は、多くの場合は宣教師を派遣する支援教会から出されるが、そのような教会がなく自費で受講する人もいる。

この教団ではこのMTIで訓練を受けた人を中心として一九九八年には八一カ国に八五七名の宣教師を送りだしており、派遣宣教師の数は単一の教団としては韓国のキリスト教の中で一番多い。

六 宣教地での経験

S牧師 現在、MTIのマネージメントを担当しているS牧師は一九九一年にMTIのプログラムで訓練を受けて五年間ナイジェリアでの宣教活動をしてきた。S牧師は神学校を卒業してからソウルの近郊都市である富川（プチョン）で開拓教会を開いた。最初は二名の信者からはじめて五年間で一五〇名ほどの信者数になったのだから開拓教会としては成功した教会であった。教会の区域礼拝をおこなっている時に、海外に直接行ってまだ信じていない人々に宣教することが自分の使命だという神の召命を感じて決心をした。S牧師の妻は反対しなかったが、両親からは反対されたという。S牧師が開拓した教会と紹介されたいくつかの教会からの金銭的な支援を受け、宣教師を求めていたナイジェリアの神学校にいつて神学生たちに神学を教え、当地の福音派の教会で説教もおこなった。アメリカやカナダからの宣教師たちも来ており彼らは西欧人である自分たちの宣教の優位性を確信していたが、ナイジェリア人の神学生たちは非西欧人であるS牧師により親しみをもってくれたという。五年の宣教を終えてから帰国し、MTIの現職にあるが将来はアジアでの宣教、とくに中国における宣教を考えて準備している。

K牧師 現在四〇歳のK牧師は大学在学中に受けたセミナーで海外宣

教を決心してそのために準備を続けた。大学卒業後に神学大学院にすみ新約学を専攻しながら、ソウル市内のT教会の教育牧師となっていたがそのT教会の支援を受けて一九八八年と一九九〇年にタイで宣教のための調査をおこなってから一九九三年からタイ南部のナコン・シ・タンマラで宣教活動をおこなっている。タイには一、〇〇〇名程の海外からの宣教師が入っているがその内の約一割が韓国からの宣教師である。南部にはムスリムが多いため宣教は難しく、現在韓国人の宣教師で南部で活動しているのはK牧師だけである。ナコン・シ・タンマラには一八の教会があるが全て二〇名ほどの信者しかおらず、また牧師がいる教会も五つしかないため日曜日には牧師のいない教会を巡って説教をしている。キリスト教徒の大学生たちと共同生活をしながら、信者の指導をおこなっているという。K牧師が行ってから現在までのところムスリムからの改宗者は一人もいない。将来の計画は他の都市に田舎から出てくるキリスト教信者の学生（中学生・高校生）のための寄宿舎を作ることと、現在K牧師が所属する教会に幼稚園をつくることである。子供たちを教育して信者の中の指導者として育成したいと思っている。時間をかけてムスリムへの伝道の方法を考え、マレーシアでの伝道にも目を向けているという。しかし一方では韓国に帰国して韓国内で自分の教会をもつて伝道をしたいという希望も捨てていない。

次のP宣教師は牧師資格をもたない平信徒宣教師であり、韓国のキリスト教ではこれからはこのような平信徒の宣教師を増やしていく計画だということである。そのために教団では、平信徒のための訓練プログラムも用意している。平信徒による宣教活動は短期間のものと、宣教師と

して入らずに一般人として現地社会に入るものがある。後者の場合には宣教活動も個人的なものにならざるをえないが、宣教師を受入れない社会への宣教を考えると必要なことだという。

P宣教師 大学院で物理学を専攻していたP宣教師（現在四一歳）はキリスト教の家庭で生まれ教会に通っていたが、大学院修士課程の時に霊的な改心を経験した。修士課程を終えてから研究機関で三年半勤務した後、大学院博士過程で研究を続けるためにアメリカに渡り博士号をとったのちにアメリカの研究機関で研究を続けていた。しかし自分の信仰と研究とを一致させるものはないかと考え続けていた。一九九三年に帰国したが小学校の時から通っていた教会の支援を得て平信徒の宣教師となることができた。一九九四年にインドネシアの東部ジャワにある大学の物理学の教師として赴任し、現地の言葉を一年間習った後に教育と研究をおこなっている。インドネシアを選んだのはムスリムへの伝道を考えてたことと、自分の専門が必要とされていたからであったという。大学の教師には中国系のキリスト教信者が比較的に多い。大学ではクリスチャンであることを隠しはしないが、キリスト教について語ることはおこなっていない。ムスリムへの伝道は難しいことは覚悟しているので、大学で教えながら親しくなり彼らの考え方を理解して二〇年位たつてから伝道できるようになればいいと思うという。韓国人宣教師も他にいるが彼らは教会を中心に活動しているのであまり関係をもっていない。日曜の礼拝は現地人の牧師がいる小さな教会にいつている。現在の生活を期限を定めずに家族と続けていくつもりだとP宣教師は語った。

以上、人数は少ないが宣教活動をおこなった人々の経験を簡単に紹介

した。彼らが共通して語るのは、西欧人の宣教師たちと自分たちとは違うということである。西欧からの宣教師たちが個人主義的であり現地の人々と親しく交わらないのに対して、韓国人の宣教師は親しみをもたれやすいことを強調する。しかし一方では、身体的・文化的近さからアジアにおける宣教の方が効果的であるとも語られる⁽³⁴⁾。

異文化との接触に関する宣教師たちの感じ方は二面的であるように思われる。西欧の宣教師に比べて異なった文化に比較的容易に溶け込めるという人々がいるかと思えば、一方では異文化に対して韓国人の宣教師は深く理解をしようとはせずに韓国的なものを強調しすぎるという批判をする人々もいる。宣教地域の違いによって意識の違いがあるのかどうかは興味深いところである。また韓国人の宣教方法に対する宣教師たちの批判（自己批判を含めて）に物質的な面に頼りすぎたという点がある。一九九七年末に韓国の経済危機が表面化する以前には経済の好調さを反映して、宣教地に対してさまざまな物資を配ることによって信者を集めようとしていたという。その意味で経済危機は物質的な援助を持続させず、宣教師たちにより霊的な面を考えさせることになったので良かったと肯定的に語る宣教師もいる。

七 おわりに―海外宣教にみる韓国キリスト教

キリスト教はいまや西欧文明の専有物ではなく、宣教師の多くも非西欧社会出身者となってきた⁽³⁵⁾。キリスト教Ⅱ 西欧文明Ⅱ 植民地主義という一九世紀的な図式はここでは崩れてしまっているかのように思われ

る。非西欧社会のキリスト教、とくに韓国のキリスト教は海外に宣教するときに何をキリスト教の福音に付け加えてもたらそうとしているのだろうか。

フィリピンで宣教をしている宣教師は早天祈祷会や通声祈祷を積極的
に導入していると語ったが、これにはフィリピンのカトリックの伝統や
スピリチュアリズムの伝統と関係しているかもしれない。またロシアの
ウラジオストックで開拓教会を開きロシア人三〇〇人の教会に育て上げ
た宣教師は、早朝祈祷会・通声祈祷だけでなく尋訪（シンバン）（牧師
が信者を尋ねて祈祷などをする）や讃揚（チャニャン）（歌と振り付け
を使った讃美）などの韓国の教会開拓で信者を増やした経験をそのまま
使ったら成功したと語った。一方では韓国の文化的なものを付与して宣
教しようとする動きもみられる。十字架を付けた道着をまとった青年た
ちによる跆拳道のデモンストレーションによる布教活動⁽³⁶⁾などであるが、
全体からいえば少数にとどまっている。宣教師の語る経験から判断
するならば、宣教師たちは韓国の土着型キリスト教を基盤としているよ
うにみうけられる。韓国教会がネビウス方式によって培った、自立・自
給・聖書中心を宣教地にも植え付けることが望まれている。⁽³⁷⁾これは海外
宣教を積極的におこなっている教団が、韓国のキリスト教の中で多数を
占める保守的な長老派の教団に多いことと関係しているかもしれない。
実際に宣教師たちが、現地においてどのような宣教活動や説教をしてい
るのかを調査してみなければならぬ。

最後に韓国の土着型キリスト教とは何であろうか。土着型というと普
遍と対極におかれる。キリスト教で普遍であるとみなされたのは、少な

くとも近代では西欧キリスト教であった。⁽³⁸⁾これは非西欧からみてのこと
であって、西欧社会においてもドイツ、イギリス、フランスそして特に
宣教大國アメリカなどそれぞれ異なった土着型キリスト教をもっている。
ややもすると西欧キリスト教をあるプロトタイプと認識し、布教された
先のキリスト教がそのプロトタイプからどれだけ距離をおいているか、
または逸脱しているかによって変容の度合いがはかられてきた。各社会
に導入されたキリスト教を土着型キリスト教とみなすことによって新し
い視点が得られるだろう。⁽³⁹⁾

しかし問題は、土着型キリスト教として全てをキリスト教の一つのバ
リエーションとして認めるのかという点である。たとえば韓国には異端
とされるキリスト教が歴史的にも存在してきたし現在でも多く存在する。
そのような教派を土着型とみなすのか、そうでないならばその線引はど
こであるのか問題となるであろう。

註

(1) 韓国統計庁『全国人口住宅調査』一九九四年。

(2) 一九九八年七月一二日に九州大学でおこなわれた「宗教と社会」学会
ワークショップ「東アジアにおけるキリスト教の受容」における池上良正
の問題提起による。

(3) これらの点については、関庚培（金忠一訳）『韓国キリスト教会史』新
教出版社、一九八一年を参照のこと。

(4) 関庚培、前掲書、六四―六五頁。

(5) 中国にあったイエズス会士による西学とその朝鮮への影響については、

- 姜在彦(鈴木信明訳)『朝鮮の西学史』(姜在彦著作選第四卷)明石書店、一九九六年、また平川祐弘『マテオ・リッチ伝2』平凡社、一九九七年、二八七―三一二頁を参照。
- (6) 李光麟「開化派の改新教観」『韓』八一号、一九七八年二月、三一―五四頁。閔庚培「開化期における基督教の受容過程」『韓』八一号、一九七八年二月、五五―七三頁。
- (7) 一八八二年の壬午軍乱の処理のための済物浦条約を締結し、修信使を日本に派遣したが李樹廷はそれに同行していた。李樹廷の受洗については、小川圭治・池明観編『日韓キリスト教関係史資料一八七六―一九二二』新教出版社、一九八四年、二八―三〇頁を参照。
- (8) 閔庚培(金忠一訳)『韓国キリスト教会史』新教出版社、一九八一年、一六一頁。
- (9) 閔庚培、前掲書、一六二頁。
- (10) 閔庚培、前掲書、一四二―一四七頁。
- (11) 李光麟「開化期の関西地方と改新教―改新教受容の一事例」『韓』八三号、一九七九年、三―二二頁。
- (12) 韓国におけるプロテスタント・キリスト教の初期における宣教方針は、一八九〇年に中国で活動していたジョン・ネビアスが招かれて示した原則によった。それは自立、自給、聖書の強調でありネビアス方式として定着した。その影響のもとに宣教地の分割がおこなわれて効率的な宣教活動がなされた。そのため現在においても地域による教派の勢力の違いがみられるという。
- (13) 韓国基督教歴史研究所(韓哲曦・蔵田雅彦監訳)『韓国キリスト教の受容と抵抗―韓国キリスト教史一九一九―四五』新教出版社、一九九五年。小川圭治・池明観編、前掲書、四五―五五〇頁。澤正彦『未完 朝鮮キリスト教史』日本基督教団出版局、一九九一年、一―三―二〇三頁。三一運動にキリスト教の果たした役割に対しての日本側の反応の一つとして朝鮮総督府『朝鮮の統治と基督教』一九一九年がある。
- (14) 柳東植『韓国のキリスト教』東京大学出版会、一九八七年、五六―六〇頁。
- (15) 閔庚培、前掲書、二四〇―二四八頁。
- (16) 韓国基督教歴史研究所、前掲書、二九四―三四七頁。
- (17) 閔庚培、前掲書、四〇四―四一二頁。澤、前掲書、二八八―三〇四頁。
- (18) 閔庚培、前掲書、四一七―四四一頁。
- (19) 柳東植、前掲書、一四四―一五四頁。
- (20) 柳東植、前掲書、一五八―一七三頁。
- (21) 安炳茂(趙容來・桂川潤訳)『民衆神学を語る』新教出版社、一九九二年。キリスト教アジアセンター編(李仁夏・木田猷一監修)『民衆の神学』教文館、一九八四年。池明観『現代史を生きる教会』新教出版社、一九八二年、二八二―三〇五頁。高冠瑞「韓国自由進歩主義神学運動の場合」国際クリスチャン教授協会編『社会変動とキリスト教』星雲社、一九八七年、二五九―二七四頁。
- (22) 권성수「한국교회 성장정체 현상의 신학적 고찰」『교회와 신안』一九七七年九月号、한국교회문화사、四二―九五頁。
- (23) 韓国人による最初の宣教地は一九〇七年の済州島であった。전호진「한국교회 선교의 선교신학과 선교전략」한국세계선교협의회 편서『한국교회 선교의』

비전과 합력』 도서출판 햇살, 一九九二年, 六一頁。

閔庚培 (金忠一訳) 『韓国キリスト教会史』 新教出版社, 一九八一年, 二二九頁。

(24) 이태웅 『한국 교회의 해외선교—그 이론과 실제』 조이선교회출판부, 一九九四年, 一五頁。

(25) 移民していった人々のセンターとしてキリスト教会が果たした役割は決して小さくはない。

(26) 이태웅, 前掲書, 二二頁。

(27) 강승삼 「권두언」 『총회선교사행진II』 대한예수교장로회총회선교부, 一九九七年, 八頁。

(28) 이태웅, 前掲書, 二二頁。

(29) 권성수, 前掲文。

(30) 韓国の教会では信者数がある程度(大体二〇〇名くらい)以上になると副牧師をおくことが多く、規模の大きな教会には複数の副牧師がいる。副牧師は一年毎の任期であり、担任牧師になったり開拓教会を開くまでのあまり長くない年数を過ごす。

(31) 開拓教会(ケエーチョク・キョフエ)は部屋を借りて教人の規模から始められる教会で、その資金は牧師が出すことが多い。韓国でキリスト教会の数が多い理由の一つがこの開拓教会が多数存在することがあげられる。信者数が増えると長老などの役員を選び教会堂を建てる。

(32) 教団派遣の宣教師は四年か五年間宣教活動をすると半年から一年の休みが与えられる。同じ宣教地での宣教を続けてもよいし宣教地を変えることも可能である。

(33) 教会はある程度の規模以上になると担任牧師の他に副牧師がおかれるが、その他に学生たちの礼拝のために教育牧師をおくことが多い。これをまだ牧師の資格のない神学生の伝道師や牧師の資格はあるが教会に職のない牧師が担当することが多い。

(34) 実際にもこの教団から派遣されている宣教師のうちの四三%がアジア(日本からパキスタンまで)であり、以下アフリカが一九%、ヨーロッパ・旧ソ連圏が一六%、中南米が一四%、中東が五%、オセアニアが二%、太平洋地域が二%となっている。(一九九八年一月の教団の統計による)

(35) 이태웅, 前掲書, 一六頁。

(36) 『한국인선교사』 一九九八年七月号, 四一五頁。

(37) 전호진, 前掲書, 四〇—四二頁。

(38) 로마・カトリック教会が普遍的な性格をもっているのはいうまでもない。

(39) この土着型キリスト教については、「宗教と社会」学会ワークショップ「東アジアにおけるキリスト教の受容」(一九九八年七月一二日 於九州大学)における議論に多くをおっている。特にマーク・マリンス氏の発表「日本における土着型キリスト教と先祖の問題」を参考とした。

Christianity in Korea : Its Adoption and Diffusion

HIDEMURA Kenji

It is a well-known fact that within East Asia Korean Society has most enthusiastically adopted the precepts of Christianity. The adoption of Christianity by non-European societies has been characterized generally within a scenario of religious belief introduced along with European culture and colonialism. However, in the Korea the colonial element was missing due to rule by a non-Christian colonizer, Japan, therefore adding to religious belief and European culture the factors of anti-Japanese resistance and nationalism.

The characteristic features of Korean Christianity are of course its enthusiastic introduction of the religion, in addition to the conversion of the country's elite in the name of modernization, its anti-colonial, anti-Japanese character, and an explosive popularity in the midst of urbanization and industrialization during the era of rapid economic growth from the 1960s, followed by a dropping off in the number of converts during the 1990s.

In light of such historical trends, Korean Christians began to be more active in propagating the faith overseas among non-Christian peoples during the 1990s, as opposed to international evangelism aimed primary at overseas Koreans during the previous decade.